

『静岡大務新聞』所掲書籍安売広告をめぐって

鈴木俊幸・友成 毅・大石明香里・金子美樹・

國分美奈穂・増田凜々・湯沢友実

中央大学FLP鈴木ゼミでは、書籍業界が大きく変動する時期、すなわち明治中期に焦点を当て、その変動のメカニズムを具体的に捉えることを目的に、明治十八年（一八八五）から明治二十一年（一八八八）までの四年間における各地方の書籍安売広告を、さまざまな地方新聞から収集して分析を行ってきた。その成果は、まず「共同研究書籍安売の新聞広告」『書籍文化史』第十八集、二〇一七年一月）と題する報告にまとめた。さらに『山梨日日新聞』『甲陽日報』所掲書籍安売広告をめぐって（『中央大學国文』第六十二号、二〇一九年三月）においては、山梨県の地方紙である『山梨日日新聞』と『甲陽日報』の二紙について同様の調査を行い、県域における書籍安売の実態についても考察するとともに、当該地方紙の特質と流通域における書籍流通の特質をあぶりだそうと試みた。本稿は『静岡大務新聞』の広告を同様の目

的と方法で検討した結果であり、明治中期の静岡県に於いての新たな事例を加えるものである。なお、本稿では、『静岡大務新聞』は静岡県立図書館所蔵の紙焼製本資料、『絵入東海新聞』は一九七二年静岡県明治新聞刊行会による複製を使用した。

一、『静岡大務新聞』について

『静岡大務新聞』は、『地方別新聞史』（一九五六年、日本新聞協会）に拠れば、その前身は明治六年（一八七三）『官許静岡新聞』として刊行された『静岡新聞』である。発行責任者は山梨易司、発行所は静岡県呉服町五丁目提醒社。週二回発行、一部金二銭の売価であった。同九年（一八七六）に『重新静岡新聞』と改称、さらに翌十年（一八七七）に『静岡新聞』と再改称し、紙幅を広げて一部一銭、一ヶ月十二銭と価格改定した。同十一年（一八

七八)に日刊となったが、社内軋轢により同十二年(一八七九)に廃刊した。提醒社を脱退した者たちが『函右日報』を創刊、残った者によって同十三年(一八八〇)に『静岡新聞』が再刊される。同紙を同十七年(一八八四)に廃刊し、改めてロンドン・タイムズの「タイム」をとって『静岡大務新聞』を創刊した。同十八年には『函右日報』を吸収合併、社名は静岡大務新聞社である。『日本全国新聞雑誌細見』(明治十九年(一八八六)、松村新太郎出版)には、代価一枚金二銭、一ヶ月金四十五銭、広告料は十八字詰め一行金一銭二厘、発行所は静岡県駿河国安陪郡静岡江川町と記載されている。明治二十一年一月には呉服町三丁目一番地に移転、一月二十七日『絵入東海新聞』に「静岡大務新聞社移転広告」/本社移転ノ建物既ニ修繕ヲ終リ、諸種ノ新器械類一切据付タルヲ以テ予テ広告ノ通り本日ヲ以テ静岡呉服町三丁目一番地ニ転移シ、旧ニ依リ新聞紙発行活版印刷ノ業務ヲ執リ、其他簿記製本等ノ御注文ニ応シ候ノ明治廿一年一月十五日静岡大務新聞社(引用に際し、句読点を付加した。以下同じ)と広告を掲載する。二月七日『静岡大務新聞』附録には「本社は昨年火災に罹り、一時諸器械は悉く烏有に帰したれども、最早悉皆新調して其整頓を告げたれば、活版印刷は勿論簿記製本等鮮明美麗を首とし、総べて廉価を以て御注文に応じ可申候」とあって、江川町の社屋

が火災に遭つての移転である。明治二十年十二月十三日『朝野新聞』広告に「広告ノ弊社儀昨夜一時半頃誤て火を失し、全社焼失の不幸を来し候に付、不得止本日より三日間休刊致し、来る十五日より発兌仕候に付、倍旧の御愛顧被成下度、此段看客諸君に御報道申上候也」/第十二月十二日 静岡大務新聞社」とあるので、火事は十二月十一日のことであつた。

明治二十一年『静岡縣統計書』によると、安売広告が流行した明治十八年から明治二十一年までの四年間の発行高は明治十八年が三二八一〇部、同十九年が三〇四一二六部、同二十年(一八八七)が四八九一七三部、同二十一年が四九三三九二部と、明治十九年に発行高は落ちているがその後伸びている。売上高については、明治十八年が六五六二円、同十九年が四〇七二円、同二十年が四九六四円、同二十一年が四九九七円となつていて、発行高と連動して上下している。

明治十八年六月六日『時事新報』に静岡大務新聞社の広告が掲載されている。

静岡大務新聞及函右日報ノ両社ハ、他日都合ヲ謀リ、合併シテ大ニ事務ヲ拡張スベキノ計画アリ。依テ函右日報ノ儀ハ五月三十一日限り廃刊シ、同日報ノ編

静岡大務新聞は公共の爲めに力を盡すべし



社告

本報の發行は、静岡大務新聞社、静岡市、大井町、八幡町、三丁目、第一番地、ニ於テ印刷ノ業務ニ専就シ、静岡大務新聞社ハ従前ノ通り新聞發行及印刷業務ニ従事スルヲ以テ兩社トモ旧ニ倍シ、益々御愛顧ヲ垂レ賜ハンコトヲ請フ。

特に政治の事項に注意するを以て自から任ざべし

明治二十年二月七日

社人 藤和太郎
編輯 藤和太郎
印刷 藤和太郎
静岡大務新聞社

輯ニ従事セシ井上寛一氏ハ更ニ静岡大務新聞ニ入テ同社員斎藤和太郎、坂井牧ノ助両氏等ト共ニ静岡大務新聞ノ編輯ニ従事スル事トス。依テ是迄函右日報購読ノ諸君ヘ合併実行マデハ來ル六月ヨリ静岡大務新聞ヲ配達スヘキニ付キ、御購読アランコトヲ望ム。尚ホ又函右日報社ハ日報廢刊ノ期日ヨリ社名ヲ函右社ト改称シ、依然静岡岡兩換町三丁目一番地ニ於テ印刷ノ業務ニ専就シ、静岡大務新聞社ハ従前ノ通り新聞發行及印刷業務ニ従事スルヲ以テ兩社トモ旧ニ倍シ、益々御愛顧ヲ垂レ賜ハンコトヲ請フ。

明治十八年六月 静岡大務新聞社
函右日報社

先述した函右日報社との合併一件の広告である。県内購読者を主に想定している地方紙が『時事新報』に県内購読者向けの広告を出している事実は、東京紙が県内で多く流通していることを裏付けるであろう。明治十九年五月二十五日・二十六日『静岡大務新聞』掲載の松屋好五郎「諸新聞配達区域拡張広告」は東京紙も配達していることを広告しているし、明治二十年九月十七日の杉本平七の「諸新聞雑誌大取次広告」でも静岡の二紙の次に『時事新報』をはじめ東京紙を取り次いでいる旨が広告されている。『時事新報』以外の他の東京紙への静岡大

務新聞社の広告掲載は確認できなかったもので、東京紙のなかでも『時事新報』が、当時の静岡県内において多くの購読者を獲得して、広告効果が期待できたのであろう。

また『静岡大務新聞』に東京紙の広告が多く掲載されていることも東京紙が静岡県内での需要が高かったことを示すと思われる。具体的には、明治十八年四月十四日、同年十二月二十七日、十九年四月十六・十七日、二十年十月二十八日、同年十一月一日に『時事新報』の広告、十八年五月二十九日、十九年三月十八日、四月二十七日、二十九日には『毎日新聞』の広告、二十年十月二十九日には『東京日日新聞』の広告、十九年二月三日・四日、二十年十月十九日には『朝野新聞』の広告、二十年九月二十五日・二十八・二十九日、同年十月十六日・十九日・二十日には『郵便報知新聞』の広告、二十年九月三十日、同年十月一日・二日・四日には『読売新聞』の広告が掲載されている。地元紙はこれらとの棲み分けのもとに存続していたことになる。(友成毅)

二、『静岡大務新聞』所掲書籍安売広告の傾向

四年間の総件数、件数の推移、広告主の傾向

『静岡大務新聞』に掲載されている書籍安売広告の総件数は、明治十八年二月から二十一年一月の四年間で四

十三件であった。四十三件という件数だけみると、東京紙の『郵便報知新聞』の四十六件、『自由灯(めざまし新聞)』の三十九件に近いが、この二紙を含めて東京や大阪紙のほとんどは兎屋の広告が安売広告全体の中の大きな割合を占めていた。しかし、『静岡大務新聞』では、兎屋の安売広告は三件しか確認できず、これまで調査してきた東京紙や大阪紙と比べるとその割合はかなり少ない。兎屋は、同県の『絵入東海新聞』にも広告を一件しか出しておらず、『静岡大務新聞』ともども静岡県の新聞を広告媒体としてさほど評価していなかったといえる。

『静岡大務新聞』に広告を出している書店は、地元静岡六店、東京四店、大阪十店で、大阪の書店が最も多い。しかし、これらの書店の中で長期にわたって継続的に広告をだしていたところは無く、たとえば近江屋本店は明治十九年十月五日から十一月二日の間、原泉堂は六月三十日と七月一日、信文堂は二月二日と三日のみの掲載で、いずれも単発的であった。

件数で見ると、地元静岡が十五件で、その割合が三四・九%、東京が十三件で三〇・二%、大阪が十六件で三七・二%と、すべての地域で三〇%台であった。これまで調査対象としてきた他の新聞には、地元・東京・大阪の三地域からの安売広告が同じような割合であった例はなく、この傾向は『静岡大務新聞』の一特色であると

いえる。

広告主である書店について見てみると、同県の『絵入東海新聞』では地元の文正堂今津巳之助(美之助とも)が出した広告が最も多かったのに対し(後述)、『静岡大務新聞』では東京の山中平助が七件と最も多く(後述)、今津巳之助は五件とそれに次ぐ件数であった。その他の書店は全て一〜三件と、飛び抜けて多く広告を出していたところはなかった。

広告数の推移については、明治十八年は三件であったのに対し、十九年には二十四件と急増し、二十年には十五件と減少、二十一年以降はほとんど見られなかった。『静岡大務新聞』における書籍安売広告のピークは明治十九年頃であった。特に、明治十九年七月から明治二十年三月までの九ヶ月間に多くの広告が出されていた。

『静岡大務新聞』の広告件数の推移と類似していた他県の新聞は、山梨県の『山梨日日新聞』、岡山県の『山陽新聞』、三重県の『伊勢新聞』であった。これらの新聞については、安売広告の総件数はそれぞれ異なるが、山中平助や近江屋書店、大阪書籍商館、九阜堂など、複数の安売書店の広告が共通しており、これら特定の広告主の存在と広告掲載時期の重なりが、広告件数の推移を類似させている要因の一つであると考えられる。

広告主と広告内容

『静岡大務新聞』への広告掲載期間は、静岡書店は明治十八年二月から二十年七月までの約二年半、東京書店は明治十九年二月から二十一年一月までの約二年、大阪書店は明治十九年二月から二十年五月までの一年三ヶ月間と、その傾向に差がみられた。静岡書店の広告は二年半の間まんべんなく見られたが、大阪書店は石川書房以外の九店は明治十九年中のみの掲載であった。大阪書店のほとんどは『静岡大務新聞』だけではなく、他紙にも広告を出しており、その総件数は多い。しかし、『静岡大務新聞』に広告を出していた大阪書店のうち、広告掲載が半年以上にわたる書店は無かった。大阪書店の書籍安売広告がそれぞれ短期集中的に行われたことがここでも確認できる。

また、『静岡大務新聞』に掲載されていた安売広告の半数以上は、他の新聞にも同じ時期に同じ内容で掲載されており、ほとんどの書店が広告の使い回しをしていた。例えば、大阪の九阜堂は「書籍臨時非常大安売広告」という広告を、明治十九年七月七日から九月二十七日の間に九回、様々な新聞に掲載していた。さらに大阪書籍商館は、二か月半の間に九紙に合計二十回、同じ広告を掲載していた。『静岡大務新聞』に広告を出していたすべての東京書店もその広告を他紙でも使い回していた。そ

の広告の掲載先で最も多かったのが、静岡に近い山梨県の『山梨日日新聞』で、『岩手日日新聞』、『福岡日日新聞』がそれに次いで多い。その他にも、『伊勢新聞』や『毎日新聞』など、様々な地域の新聞に同じ内容の広告を出していた。その件数の多さは、東京書店にとって、これら地方紙と同等の宣伝媒体として『静岡大務新聞』が選ばれていたことの現れである。いっぽう、地元静岡書店は、そもそも他の地域の新聞に書籍安売広告をほとんど載せておらず、費用対効果の優れたもつとも有効な宣伝媒体と『静岡大務新聞』を見なしていたと思われる。他地域の新聞ではなく、地元紙に出している静岡書店の広告は、当然地元の客の来店を期待してのものである。見出しにしても広告文にしても、あざとさを感じさせるものはほとんど無い。掲載している書名にしても、稗史小説類が多いのは当然としても、歴史や法律に関する本も多く、篤実な印象を与える広告がほとんどである。それに対して東京や大阪の書店による安売広告は表現が大袈裟で派手である。特に大阪書店による広告には、「無類特別元価発売」「百周年の大祝」「緊急報知」といった大げさな表現が多く使われており、いかに読者の目を惹くかというところを第一に考えていると思われる。書目も流行の稗史小説はもちろんであるが、兎屋本のよなきわどい書名のもの、造化機論のような内容的なき

わどさを期待させるようなものが多い。定価と売価を比較させてその桁外れの安さを強調する広告も多い。これは他の地方紙についても同様である。郵便や通運を利用して送金と送本を行うという、客が来店することを想定しない商法である。いかに客を釣り込むか、その効果の高い広告を出せるかどうか勝負の世界である。いかがわしさを拭えない、詐術すれすれの、もしくは詐術そのものの世界がここにある。

具体例として、『静岡大務新聞』に最も多くの広告を出していた書店である山中平助について見てみよう。山中平助は、地誌類や東京書籍商の組合文書にも名前を見出せないし、書籍の刊記に売弘として記載されている例を知らない。つまり、新聞広告によってのみその営業を確認しうるのみである。これまで調査に及んだ新聞に限っての件数であるが、山中平助が出した広告は三十二件確認できた。最初に安売広告を掲載したのは明治二十年二月六日の『静岡大務新聞』で、同年三月十二日に『新潟新聞』に掲載したのを最後として、これ以後山中平助の広告は確認できない。その間約一ヶ月たらずである。他の書店と比べて件数は少なくないが、その活動期間は圧倒的に短く、この間に集中的な広告戦略を展開していたことになる。

広告掲載紙で最も多いのが『静岡大務新聞』、次に

『甲陽日報』、『山梨日日新聞』、『伊勢新聞』と続く。他にも『岩手日日新聞』や『海南新聞』、『信濃毎日新聞』など、地方紙を掲載先として選んでおり、地元の東京紙には一切掲載していなかった。新聞広告以外に書店としての営業を確認できず、地元紙には広告を出さず、遠隔の地方紙にのみ短期集中的に安売広告を出すという傾向は、大阪の安売業者にもよく見受けられる。同様の商法と見なしてよからう。

山中が出した広告は、二月の「極安価広告」と三月の「書林開業祝と安売広告」の二種類のみである。この二種類を多くの新聞に掲載していたのである。前者は「極安価広告」標註／絵入増補常山紀談／●洋装金文字入頗美本全巻冊特別正価金壹円／（中略）／東京京橋区南伝馬町三丁目四番地／文房堂 山中平助」と一点のみの広告である。この書籍は、二十年一月に鶴声社が出版したもので、二円の定価が付けられている。大部な『常山紀談』の活版印刷による翻刻は、明治十年代後半、新興の出版社によって盛んに行われた。本書もその一つである。後者の広告は、「書林開業祝と安売広告」と題し「弊堂儀今般書籍商開業仕候ニ付祝トシテ左之書籍非常大安売仕候間他店ト御見競之上御注文奉願上候」、「本日ヨリ三月三十一日迄安売可仕候」と期限付きでの開業の祝い売りを行う。掲載の書名は十四点で、たとえば●真書太閤記

美製全巻冊定価金拾円 一円五十銭」と、定価との対比でその安さを強調する手法である。この『真書太閤記』も複数の出版社による翻刻があって、この書目にも掲載されている『南総里見八犬伝』などとともに競合しがちな大部の書籍であった。他にも『大日本国民専用実地有益大全』や『平仮名絵入通俗日本外史』といった兎屋誠出版のものなど、この時期の安売広告によく見かける書目が並んでいる。（大石明香里）

三、県内書店の安売広告

書籍安売広告を出した静岡県内の書店をいくつか検討してみよう。

錦袋堂堀田勝二

藤枝本町の錦袋堂は、県内でいち早く書籍安売広告を掲載した書店である。明治十八年一月八日『自由灯』に「○恭賀新年／古今実録書 定価三割引／洋綴稗史書 定価二割ヨリ五割引／小説類 定価三割ヨリ四割引／右ハ御年玉として御直引差上しうへに、美景より取の物を呈上仕候間、旧に倍し隅から隅まで御求めを乞ふ。／東海道藤枝本町／一月一日より三十一日まで 錦袋堂書舗」という広告を出している。兎屋誠の安売広告は明治十六年末から見られるが、他の書店が追隨するのは、ほ

とんど明治十八年になってからのことであるので、錦袋堂のこの挙はかなり早期に属する。東京紙に掲載したのは、これが効果的であったこと、すなわち、市場占有率、広告媒体としての機能が地元紙より優れているとの判断によるものであろう。美景呈上をうたっているところなど、遠隔地の購読者を釣り込もうとしたものではなく、実際に店舗に足を運んでくれるよう広告したものと受け取るべきである。

明治十八年二月十三・十四日『静岡大務新聞』にも「錦袋堂祝ひの広告」と題する安売広告を出している。

錦袋堂祝ひの広告

サア〜今度御得意様より御厚情を請けたる売揚、利益を帳調するに思ひの外にて実に難有き仕合で、今般弊堂祝ひをせんとす。そこで御得意様江御礼の爲め大勉強大安売、なんでもとほうも無き割引にて旧一月一日より三十日の間、新版もの斗沢山積置、かたつばしから売捌升から、ドヤ〜旦那様にも御しんぞ様にも稗史の御すきの方にはいらつしやい〜。サア〜直の安き事ひやかしてもわかる。皆さんごひいきの売買現金安売の隊長 藤枝にて 堀田勝蔵敬白

地元紙への掲載であるし、安売広告にありがちな調子のよい広告文ではあるが、これとて店に客が実際に足を向けることを目的としたものであろう。人気に乗じて量産されている実録物、稗史小説類を取り扱っていた地域に根ざした書店であると見受けられる。(鈴木俊幸)

今津巳之助

静岡呉服町四丁目の文正堂今津巳之助は『静岡大務新聞』『絵入東海新聞』に多くの書籍安売広告を掲載した書店である。明治二十年十一月十八日『絵入東海新聞』に出した「開店節大安売広告」に「弊社開業十五回祝として、当る十一月十六日より三十日迄、向十五日間該書目並に其他共大奮発世界無類の廉価を以て販売仕候間、続々御購求御注文の程、伏て奉希望候也」とあって、明治五年開店のようである。明治ゼロ年代半ば創業の地方書店は数多い。同年八月の学制発布を受けて、地域の教科書需要をまかなうことで書店業を成立させていった者たちであり、この店も同様であったらう。学校の御用を達し、新時代の地域に根ざした商売である。

今津巳之助の書籍安売広告は十件確認できた。明治十八年五月十三日『静岡大務新聞』掲載の稗史小説類の広告が最初で、先に触れた明治二十年十一月十八日『絵入東海新聞』のものが最後である。広告の掲載は、この二

紙のみで、東京紙や他府県の地方紙には見られない。今津にとって費用対効果のもっともよい掲載先は地元紙であったわけで、ここからも今津の地域に根ざした商売のありようが浮かび上がる。

明治二十年十月四日と六日に『静岡大務新聞』に今津が掲載した広告は次のような広告文のものである。

他店大安売値段の五分引きで売ります其為広告

商業上競争を試むるは近頃の大流行にて、買人の僥倖、売人の勉強。処で弊店今般無類の大奮発義利々々決着にして、品物を安く売って御愛顧を買ひ、利益を薄くして御ひるきを厚くせんとの目的にて、何書に限らず他店の大安売直段の五分又は一割引にて売仕候間、栄当々々御来車、御註文の程奉希上候也

(書目略)

右之他稗史小説其他和漢洋書上等品一千種以上各々数千部御座候。

書林文正堂 静岡呉服町四丁目 今津巳之助

「大流行」と広告文にあるが、この派手な文言はその流行の安売広告の調子をなぞったものであり、書目と価格を掲げて安さを具体的に示すのも同様である。同紙掲

載の今津広告は比較的このようなものが多いが、対して『絵入東海新聞』掲載のものは、先に触れた明治二十年十一月十八日掲載のものは例外的で、概して派手さが希薄である。たとえば、明治二十年二月二十四日掲載のものは次のようなものである。

各位益々御清適奉敬賀候。随つて弊店儀、従来稗史小説和漢洋書小学校教課用書類勉強販売仕候。幸にも各地諸君の信用を得、正直店の御高評を蒙り、陸續御註文御来車被下、日々隆盛に趣き有難奉萬謝候。右御厚謝として、猶一層勉強清々注意を加へ、大奮発の廉価販売仕候間、続々御購求被下度伏て希望仕候。

他には「着荷広告」として、広告文が無く単に書名を並べるだけのものが多い。同じ地域の新聞であるが、今津に使い分けの意識があったことは明らかで、ここに両紙の地域における役割の差異を見ることができである。(國分美奈穂)

文林堂と文林堂本店

静岡江川町十二番地の文林堂廣瀬市蔵は、浪花屋の家号で古くから営業している老舗の書店であった。坂井闌

「静岡の書肆の変遷(其一)」(『本道楽』一卷二号、一九二六年六月)に「慶応明治年間の老舗としては江川町の廣瀬市蔵(本市)が名古屋を除き海道一であつた、この主人は髪がボサ／＼してゐたのでボサ市と人がいつた、本も読めるし商才もあるので、駿府の役人附静岡藩の職員録なども出版し、明治五六年頃同町にゐた村松良肅氏の著書登高自卑其他を出版し、小学校が出来てから浦野鋭翁氏の傍訓単語篇などを出版した、明治八九年から山本正至、田沢昌永両氏の算題叢を出版して全国に売り広めて身上をよくした」とあるように、江戸時代より駿河では突出した書店で、明治になって『筆算訓蒙』や『老子講義』といった教科書類も出版、手広い営業を行っていた。また『静岡大務新聞』の前身である『静岡新聞』などの売捌きも行っていた。その新聞広告も、教科用書中心の手堅いものについてのものばかりで、安売広告は確認できない。その廣瀬は、明治十九年五月二十七・二十八・二十九日の『静岡大務新聞』、五月二十九・三十日の『朝野新聞』、六月九日の『時事新報』等の東京紙に次の広告を出している。

静岡七軒町二丁目四番地文林堂本店ナル者、東京毎日朝野ノ兩新聞紙上ニ書籍大安売ノ廣告致候由ニテ、弊店へ御照会ノ向モ有之候得共、右ハ弊店ニ於テ一

切關係無之ニ付、此段為念愛顧ノ諸君へ廣告ス。

静岡江川町十二番地書林

文林堂 廣瀬市蔵

静岡七軒町二丁目四番地文林堂本店とは一切関係ないといふことの周知をはかるための広告である、この文林堂本店の広告は、これまで確認できた限り、五月二十二・二十三日の『扶桑新報』、二十三日の『朝野新聞』『毎日新聞』『郵便報知新聞』、二十四日『山梨日日新聞』、二十八日『奥羽日日新聞』、五月二十九・六月二日『秋田日日新聞』に見ることができた。五月下旬から六月はじめにかけて、東京紙と各地の地方紙に集中的に出しており、これ以後は一切見かけない。内容はすべて同じである。「五月二十日より三十日間●書籍大安売の飛切広告」と見出しをつけて、安売書目を定価と売直を対照させる典型的なものである。広告文も「弊店開業以來日浅しと雖とも、物品の精良なると直段の廉価なるとに因て大に四方諸君の御愛顧を蒙り、商業日増に盛大に相赴き候間、弊店の喜悅不過之候。付ては今回右祝の爲、且商業拡張の爲、尚一層の大奮発を以て、列記の通り三十日間大安売飛切の大勉強に付き、期限相切れ申候へば、直に元価に復し可申候間、右期日三十日間の内に大至急御注文被下度候」と、この時期の安売広告にありがちなうたい文句である。

文林堂本店という書店の存在を、これまで文林堂廣瀨市蔵は認識していなかったことが廣瀨の広告からうかがえる。また、文林堂本店の広告は地元紙には一切確認できない。店舗を訪れるはずもない新聞読者に向けて、遠隔地の新聞に短期的に掲載するこの方法は、大坂の業者によく見られる。廣瀨が懸念し、また実際に問い合わせがあったことを述べているように、このきわめて紛らわしい店名は、広告を見た人間の錯誤を誘うであろうし、またそれを狙って「本店」を名乗った嫌疑は濃厚であろう。文林堂廣瀨市蔵のこれまでの実績による信用を利用、悪用しようとしたものである可能性は極めて高い。なお、廣瀨が広告を出したと同日の明治十九年五月二十九日『朝野新聞』に「弊店儀本月十五日より三十日間書籍大販売の報告致候得共都合に因り一時廃業仕候此段御断申上候也 五月二十八日 静岡七軒町二丁目四番地 文林堂」という広告を確認できる。これ以後、文林堂本店を名乗る静岡書店の消息は一切たどることができない。この時期流行の書籍大販売の危うさ、広告が本来的に持ち合わせている虚構性をここに見ることができである（金子美樹）

四、『絵入東海新聞』と比較して

『絵入東海新聞』とは

『絵入東海新聞』は、静岡県の地方紙であった『東海暁鐘新報』の号数と新聞購読者を受け継ぎ、明治二十年四月四日創刊、一年後の明治二十一年三月三十一日まで貫行社（後に東海社と改名）から発行された。『東海暁鐘新報』の創刊者である前島豊太郎は自由民権運動家であり、『東海暁鐘新報』は静岡県下の自由民権運動の機関紙の役割も果たしていた。しかし『絵入東海新聞』にそのような傾向はない。絵入新聞とは明治時代に挿絵入りで通俗的な読み物を中心に発行された新聞である。『絵入東海新聞』も小説とその挿絵が紙面の幅を取っている。売価は一部一錢一ヶ月二十五錢。明治二十一年と明治二十二年の『静岡県統計書』の発行高の推移からうかがう限り、明治二十一年三月に廃刊となつてからは『東海日報』に購読者が流れていったことが推測できる。

売捌店は、蘭契社礎倭三郎（沼津）、杉本平七（静岡）、育仲社江川勝太郎（藤枝）、大塚好五郎（掛川）、亀甲堂穂積準三（見付）、通運会社林弥十郎（浜松）の六か所である。この全ての売捌店は『静岡大務新聞』も同様に取り扱っている。『静岡大務新聞』の売捌店は他にもあり、『絵入東海新聞』より流通規模は大きい。

明治二十年『静岡県統計書』(明治二十二年、静岡県)に記載されている『絵入東海新聞』の発行高は三〇一三四五部である。明治二十一年『静岡県統計書』(明治二十三年、静岡県)には『絵入東海新聞』の紙名は無く、代わりに『東海日報』名が見られる。『東海日報』の明治二十年における発行高の欄には同年『絵入東海新聞』の発行高と同じ数字が記載されており、『東海日報』が後継紙であることがここからも確認できる。また、明治十九年『静岡県統計書』(明治二十二年、静岡県)には『東海暁鐘新報』の明治十八・十九年の発行高が、二二五九二〇部と二五四六四四部と記載されている。部数を伸ばしているわけであるが、『絵入東海新聞』に移ってさらに大きく増加している。新紙となって新たな購読者をさらに獲得したことがうかがえる。

明治二十年における『静岡大務新聞』の発行高は四八九一七三部で、同年『絵入東海新聞』の一・五倍以上である。このように売捌店の数も発行高も上回っている『静岡大務新聞』は『絵入東海新聞』に度々広告を掲載している。このことから二紙の読者層は重なってはいないと考えられ、『静岡大務新聞』が『絵入東海新聞』を新たな購読者の獲得を見込める広告媒体であると認識していたと推測できる。(増田凜々)

両紙の書籍安売広告

表1と表2は、それぞれ『静岡大務新聞』と『絵入東海新聞』における安売広告の件数を、安売広告の掲載された年と月毎、更に広告主の書店の地域毎にまとめたものである。表3は『絵入東海新聞』の発行開始年である明治二十年以降の二紙の安売広告件数をまとめたもので、より正確に二紙の特徴を探るために同時期に限定して比較した。また、二紙の広告料は『静岡大務新聞』が十八字詰め一行金一銭二厘、絵入東海新聞が一行一日間一銭二厘、三日間で九厘、五日間で八厘、七日間で七厘、十日間で六厘、花枠やその他輪郭をつけたものは三割増であり、一日あたりだと二紙とも同じ金額であるが、『絵入東海新聞』の場合、長い期間掲載するほど広告料が安価になるという特徴がある。しかし『絵入東海新聞』に掲載された安売広告で三日以上掲載している書店は今津巳之助のみであり、他の書店がこの広告料の割引を適用されたとは考えにくい。そのため、基本的に二紙ともほぼ同じ値段として良いと考える。

表1と表2を比較すると、静岡から『絵入東海新聞』に広告を出している書店は今津巳之助だけであり、『静岡大務新聞』に何度か出している文林堂、金欄閣、錦袋堂などは、同じく地元の新聞にも関わらず『絵入東海新聞』には安売広告を出していない事がわかる。これらの

表1、静岡大務新聞における安売り広告

	静岡	東京	大阪
M18 2月	2		
5月	1		
M19 2月		1	2
5月	3		
6月			1
7月			3
8月	1		2
9月		2	2
10月		2	2
11月			1
12月	1		1
M20 1月	4		1
2月	1	3	
3月		4	
5月			1
7月	1		
M21 1月		1	
小計	14	13	16

合計	43
----	----

静岡	今津美之助	5
	文林堂	3
	金襴閣	3
	錦袋堂	2
	杉本平七	1
東京	山中平助	7
	兔屋	3
	川崎屋書店	2
	永昌堂	1
大阪	近江屋本店	3
	信文堂	2
	原泉堂	2
	大阪屋	2
	石川書房	2
	山崎書房	1
	九阜堂	1
	大阪書店	1
	大阪文学舎	1
	大阪書籍商館	1

表2、絵入東海新聞における安売り広告

	静岡	東京	大阪
M20 4月	3		
5月	2	1	2
6月			2
8月	1		
11月	1		
12月			1
M21 1月	1	1	
小計	8	2	5

合計	15
----	----

静岡	今津美之助	5
	静岡大務新聞社	3
東京	丸屋太一郎	1
	兔屋書店	1
大阪	近江屋書店	2
	丸屋書店	2
	川井美津書店	1

表3、同時期でみた二紙の比較

静岡大務新聞				
	静岡	東京	大阪	小計
M20	1月	4		1
	2月	1	3	
	3月		4	
	5月			1
	7月	1		
M21	1月		1	1
小計		6	8	2

合計	16
----	----

絵入東海新聞				
	静岡	東京	大阪	小計
M20	4月	3		
	5月	2	1	2
	6月			2
	8月	1		
	11月	1		
	12月			1
M21	1月	1	1	2
小計		8	2	5

合計	15
----	----

書店は錦袋堂が一度だけ『自由灯』に掲載していた例を除くと『静岡大務新聞』にしか広告を出していないため掲載先を『静岡大務新聞』に絞って広告を出していた書店であると考えられる。また、反対に、東京の丸屋太郎、大阪の丸屋書店、川井美津書店などは『静岡大務新聞』には一度も出していないが『絵入東海新聞』には広告を出していることがわかる。これらのうち丸屋書店は『信濃毎日新聞』・『山陰新聞』・『出羽新聞』・『岩手日日新聞』等にも広告を掲載しており、多数の地方新聞に広告を出していた書店であるが、丸屋太郎と川井美津書店は『絵入東海新聞』以外の新聞に広告を一度も出しておらず、何故数ある地方紙の中で『絵入東海新聞』を選んだのが気になる点である。

表3、『絵入東海新聞』複製の所収期間である明治二十一年で比べると、両紙における安売広告の総数に大きな差はないが、東京書店の広告数については『静岡大務新聞』の方が圧倒的に多く、この期間中に『絵入東海新聞』に安売広告を載せた東京書店は二店のみである。反対に、表1、明治十八年～二十一年の期間で見ると大阪書店の広告数が多い『静岡大務新聞』であるが、表3で示した期間においては大阪書店の広告数は『絵入東海新聞』よりも少数である。『静岡大務新聞』掲載の大阪書店の広告数は明治十九年をピークに以後減少して

おり、明治二十年以降は二件しかない。それに対して明治二十年以降は東京書店の広告数は増加していることが表1から読み取れる。

以上をまとめると、『静岡大務新聞』については、明治二十年以降、東京書店の広告は多いが大阪書店の広告が極端に少なくなる。それに対して、『絵入東海新聞』は、同期間において東京書店の広告数は多くないものもの大阪書店の広告数が『静岡大務新聞』より多い。両紙の間には、同じ静岡の地方紙でありながら明確に広告主の傾向に差があり、それは読者層の差異が関係している可能性があるかもしれない。(湯沢友実)

五、静岡県における新聞流通と書籍流通

新聞購読者数の増加、新聞発行部数の増加は、新聞を有力な広告媒体として定着させた。明治十年代末に流行した書籍安売りの多くは新聞広告に大いに依存した商法であった。

いっぽう、新聞購読者数の増加は、新聞・雑誌の流通網を発達させた。旧来の書籍流通網と別立てで、また縫り合わさって、太く細やかな流通経路が確保され、速やかにまた大量の商品がここを流れることになる。もともと書籍業を営んでいた者が新聞や雑誌を手がけるようになり、その経営の規模を大きくしていくこともあり、ま

た、新聞店として営業を始めた者が、書籍も手がけ始めることもある。明治十八年頃からの数年、ちょうど書籍安売りが各地で展開された時期は、書籍流通の業界が様変わりする時期と重なっていると思われるが、それには新聞・雑誌の流通に依存する書籍の増加という動きと密接な関係があるろう。この頃安売りに多く供された人気の稗史小説の取扱いは、新聞・雑誌に関わる業者が多く行っており、彼らが書籍の安売りを展開することも少なくなかった。先に紹介したように、明治十八年二月十四日『静岡大務新聞』に「錦袋堂祝ひの広告」と題する安売広告を出している藤枝の錦袋堂堀田勝三は『自由灯』第一号(明治十八年四月十八日)広告に「○絵入新聞自由灯大売捌所／東海道藤枝駅 錦袋堂」とも見えていて新聞販売も行っていた。売弘書店として名前が確認できる書籍『大日本 改進黨員実伝』(明治十五年)、『論語講義』(明治十八年)のいずれも新聞・雑誌の取次・販売を主業としている法木徳兵衛の出版物であることも、この新たな流通に大きく依存している書店であることを示しているであろう。

以下、静岡県内の事例をいくつか検討してみる。

杉本平七

静岡江川町の榮兮堂杉本平七は、明治十七年十一月七

東京諸新聞改正定價表

部	一ヶ月分	三ヶ月分	半年分	一ヶ年分	
金五錢	前金壹圓十錢	前金三圓十錢	前金六圓	前金壹拾圓七十錢	東京日々新聞
同	全壹圓八錢	全三圓五錢	全五圓九十錢	全拾壹圓六十錢	郵便報知新聞
金三錢五厘	全八十錢	全貳圓廿五錢	全四圓四十錢	全八圓六十錢	朝野新聞
同	同	同	同	同	東京每日新聞
金三錢	全七十錢	全壹圓九十錢	全三圓八十錢	全七圓五十錢	東京曙新聞
金貳錢	全四十七錢	全壹圓三十錢	全貳圓六十錢	全五圓	讀賣新聞
同	同	同	同	同	繪入新聞
金壹錢八厘	全四十壹錢	全壹圓廿錢	全貳圓三十錢	全四圓六十錢	鈴木田新聞

右ハ去七月中各新聞廣告欄内ニ記載有之本月ヨリ定價改正ニ相成候ニ付市中配達ノ分前書ノ通改正相成候間此段御承知ノ上不相替御愛顧御看覽ノ程奉願上候願首

明治十四年八月 諸新聞賣捌所 杉本平七敬白

看客諸君

日『静岡大務新聞』廣告「本社新聞発売所及発売人」の筆頭に「静岡江川町 杉本平七」と名前があがっていて、当紙流通の要となる販売店であった。杉本平七の引札「東京諸新聞改正定價表」は、明治十四年八月発行のもので、『東京日々新聞』『郵便報知新聞』『朝野新聞』『東京横浜毎日新聞』『東京曙新聞』『読売新聞』『絵入新聞』『鈴木田新聞』の八紙の定價改正を報じ、「右ハ去七月中各新聞廣告欄内ニ記載有之本月ヨリ定價改正ニ相成候ニ付市中配達ノ分前書ノ通改正相成候間此段御承知ノ上不相替御愛顧御看覽ノ程願上候願首/明治十四年八月 諸新聞売捌所 杉本平七敬白/看客諸君」としている。この時点でこれだけの東京紙を扱っていたわけで、これらの新聞社が出す自社広告にも売捌店として杉本は名を連ねている。

管見に過ぎないが、杉本の名を確認できるもっとも早期の資料は『地方官會議全評 第五篇』(明治十三年、共同社)の売弘書店一覽記事であるが、創業は明治九年らしい。『絵入東海新聞』明治二十年九月十六日広告「諸新聞雜誌大取次廣告」に「弊店儀明治九年開業以来看客諸君ノ御愛顧を蒙り日二月ニ盛大ニ立至り候段難有奉深謝候」とある。この広告末に「静岡江川町 杉本平七/江尻入江町 同支店/興津仲宿町 同支店」とあって、江尻・興津に支店を設けていることがわかる。新聞売捌

の営業は上り調子のものである。それは新聞購読者層の増加が一番の要因であるが、特に東京紙の取扱いはついでには輸送インフラの整備が追い風になっていることは確かである。この明治二十年における東京紙輸送の主たるところは、おそらく横浜・清水間の水運であったろう（この水運については、栗倉大輔「明治前期における清水港から横浜への製茶移出と清水廻船問屋」『社会経済史学』七九巻二号、二〇一三年八月）に詳しい）。これは、輸出にも供される製茶を主力とした県産品輸送量の増加とともに、相互的に安定的な輸送力を確保していったものと推測される。加えて、「目下漸次汽車ノ往復モ開ケ各新聞ノ送達モ迅速ニ相成候」と同広告口上にあるように、明治二十年七月に横浜・国府津間で東海道鉄道が開通し、そこからの馬車便という「迅速」な輸送が発想できたし、国府津・静岡間は同二十二年二月、静岡・浜松間の開通は同年四月まで待たなくてはならなかったものの、鉄道敷設工事と駅の建築の進捗は、県内紙で次々と報道され、「漸次汽車ノ往復モ開ケ」つつある実感を得ていたものと思われる。

この広告で取扱いの諸新聞を列挙した後に「此外諸雑誌類数種御座候間是又御注文被下候ハ、新聞同様速ニ配達仕候也」と記すように、雑誌も新聞同様に取り扱っているわけであるが、営業は新聞・雑誌にとどまらない。

管見に入った書籍の売弘書店一覧記事の中に杉本店を掲げてあるものは以下のとおりである。『地方官会議全評第五篇』明治十三年、共同社）、『今古実録第三号真書太閤記第十七』明治十五年、栄泉社）、『今古実録赤穂精義参考内侍所 卷四』同、同）、『自由官権両党人物論 二篇』同、大野泰雄）、『月雪花恋路の踏分 前編』明治十六年、春陽堂）、『長脇差小鉄乃利刀』同、同）、『普語質屋庫』同、著作館）、『勅繡像奇談』同、九春社）、『貞烈操の一節』同、塚原房吉出版、愛善社発売）、『絵入西遊記 卷一』同、辻岡文助）、『俳優評判記 二十二編』同、植木林之助）、『徵兵令解釈』明治十七年、九春社）、『怪談牡丹燈籠 五編』同、東京稗史出版社）。

栄泉社の今古実録のように号数を備えて雑誌同様の流通を想定していたものや、九春社『徵兵令解釈』のように雑誌社発行のものは当然として、それ以外にも稗史小説類の取扱いを多く確認できる。この手の書籍の広告に当地売捌所として杉本が名を連ねるものはしばしば見かける。たとえば、『静岡大務新聞』明治十八年十二月二十四日広告に「三世柳亭種彦作 尾形月耕補図」○貞烈美談小夜時雨 絵入全巻冊読切／（中略）／東京銀座二丁目稗史出版共隆社／静岡呉服町一丁目 今津美之助／全江川町 杉本平七／全伝馬町 斎藤茂右衛門」とあるように、安売広告を出した地元書店として先に取り上げた

今津巳之助とともに共隆社版書籍の売弘に関与していることがわかる。『絵入東海新聞』明治二十年四月十四日所載「配達区域拡張広告」に「小説書類は勿論何書籍ト雖モ一ト際勉強価ニ至急御取次可仕候也」として「静岡江川町七番地ノ諸新聞雜誌稗史小説書売捌 杉本平七」と末に稗史小説の取り扱いを掲げているように、明治十年代後半からますます流行の「稗史小説」がこの店の營業の柱の一つとなっているのである。

明治十九年八月十五日『静岡大務新聞』に杉本が掲出した広告を見てみよう。

新板着荷広告

弊店儀は、先キニ第壹回勉強発売書目広告仕候処、意外之御高評ヲ蒙リ、四方諸君之御引立ヲ以テ非常之売高ニ至リ、引続第二回第三回ト、トンく拍子ニ登リ掛タル処、今般着荷ノ新板書籍ハ驚程ノ大安売ニテ、第四回目ヨリ下落シテ、○デ三回目迄之直段ヲ廃シ、右為御礼、本月十五日ヨリ同廿日迄、尚又一層大奮発廉価ニ差上候故、遠国ヨリノ御注文ハ、金壹円以上御購入ノ諸君エハ書籍運送費弊店ニテ支弁仕候間、不相替陸統御注文之程奉希望候也。但シ今般改正仕日々取扱候各新聞ハ、時事新報、東京入新聞ハ不残無運送ニテ速達ヲ專一ト勉強仕、

又持合せ書籍及着荷分共合候得ハ、數種ニ候間書目ハ別冊ニ仕立候ニ付、御入用之諸君ハ御報知次第呈進□申候。尤静岡市内ハ金式錢、郵便切手申請ケ書籍代価郵便手代用ハ壹割増ニ願フ。

八月 静岡江川町 杉本平七

前半は書籍の安売広告である。「第壹回勉強発売書目」については未見である。「第二回第三回」についても知見が無い。第四回の「今般着荷ノ新板書籍ハ驚程ノ大安売ニテ」とあって、杉本が安売用の書籍の供給を得てこれを行っていることが推測される。杉本の新聞・雑誌の流通網は、そのまま稗史小説類の流通網であり、その流通規模の大きさが、東京からの有利な供給を継続的に行わせているのである。

県内諸地域の新聞売捌所と取次業者による書籍流通

まず、遠州から。『静岡大務新聞』『絵入東海新聞』等諸紙を扱っていた遠州浜松の林弥十郎は、明治十八年九月八日『静岡大務新聞』に掲載した広告に「新聞無運送料配達廣告ノ静岡大務新聞ノ壹枚金式錢ノ一ヶ月前金四拾五錢ノ右ハ今般浜松市内ニ限り無運送料ヲ以テ配達仕候間其地方御便宜ノ場所ハ追々右ニ準シ配達可仕候事ノ取次所 浜松伝馬町 通運会社 林弥十郎」と肩書きし

ているように、伝馬町で内国通運浜松分社を営んでいた。明治十七年十一月七日『静岡大務新聞』「本社新聞発売所及発売人」に名を連ねていないので、新聞売捌への参与は明治十八年からのことかと思われる。『浜松市史三 近代編』(一九八〇年、浜松市)に「見付・袋井・掛川などにも分社がおかれ、取次所が白須賀・新居・舞坂・三ヶ日・気賀などにおかれている」とあるが、後掲『時事新報』広告にあるように、これはそのまま林の新聞配達区域となる。

掛川西町の松屋大塚好五郎は早くから『静岡大務新聞』も取り扱っており、「本社新聞発売所及発売人」として名前が掲載されている。掛川を中心に、佐野郡・城東郡まで同紙と『絵入東海新聞』の配達を行っていた。

明治二十年一月二十三日『静岡大務新聞』掲載の「新聞配達拡張広告」には「遠州掛川宿西町書肆／廿年一月和漢洋書小説稗史筆墨表簿紙類 松屋好五郎」と末に記しているように、もともと手広く書籍業を行っていた店であった。明治七年刊『商法事情』(江島喜兵衛版)や『遠江風土歌』(立志社近藤巴太郎版)あたりから売弘書店一覧記事に名前を見出すことができる。おそらくは江戸期には書籍を扱うようになって掛川における書籍流通の要となっていたものと思われる。『東京 華謡新聞 三十五号』(明治十年、風香月影社)や『団々珍聞 三十三

号』(同、団々社)、また『東京新誌 百三十三号』(明治十二年、九春社)の売捌としても名前が見え、比較的早期から新聞・雑誌類も取り扱っていたのである。教科書や参考書類をはじめ手広い営業が確認できるが、明治十一年代後半、流行の稗史小説類の取扱、いも多い。

藤枝の育仲社江川勝太郎は新聞売捌を主業としていた店であった。明治十七年十一月七日『静岡大務新聞』に「弊舗之儀、東京静岡各新聞雑誌取次仕候処、九月三日ヨリ発売東京ノ勉強新聞大坂朝日新聞之儀該新聞題号之通精々勉強致シ配達仕候間、陸続御購求御愛顧ノ程奉願候。以上。／駿河国藤枝宿／新聞雑誌取次所 育仲社」という広告を出しており、早くより東京紙や県内紙の取次を行っていた。同紙明治十九年五月十四日の『時事新報』「無通送料配達広告」には「駿河国藤枝宿益津町静岡両新聞特別売捌所」という肩書きで載っている。『静岡大務新聞』明治十九年十月二十八日に育仲社は広告を載せている。「看客諸君之御愛顧厚キニヨリ、弊社義追々手広相成、日ニ増加シ難有奉鳴謝候。就テ今般各社新聞改革ニ準シ、弊社モ一層改良シ、忠実ヲ主トシ精々廉価ニ売捌ハ勿論、静岡両新聞ハ発行次第手便ヲ以夜中ニ通送順次為シ、藤枝宿市内外及遠州川尻静波ノ地ニ至ルモ聊カ無淹滞一般早朝ヨリ配達、東京諸新聞モ極メテ迅速仕候間、旧ニ倍シ続々御注文アラント奉願候」と

して取扱新聞・雑誌の目録を掲げ、末に「諸新聞雑誌類
稗史小説書籍類売捌所 東海道藤枝宿 育伸社／全 榛
原郡川尻村老番地 育伸社支店」としている。川尻村に
も支店を設け、流通力を増しているわけである。

この広告の追記に「追テ稗史小説書籍類着荷仕候ニ付、
非常之廉価ヲ以テ売捌仕候間、現品御覧ノ上沢山御購求
被成下度候」とあり、稗史小説の取扱もうたうように
なっている。

さて、明治十九年五月一日『時事新報』に時事新報社
と東海堂平野晋とが連名で広告を掲載する。

無通送料配達広告

今般府下東海堂ト特約ヲ結ヒ、左ノ各地ヲ時事新報
無通送料配達ノ区域ト定メ、五月一日ヨリ郵便税ヲ
申受ケズ、新報定価ノミニテ各売捌所ヨリ迅速配達
セシメ候間、同地方購読ノ諸君ハ右売捌所ヘ直ニ御
注文可被下候。

伊豆国三島宿 君沢郡 田方郡

豆州三島宿小中島町 清冽堂 山本与十

駿河国沼津 原 吉原

駿州沼津宿通り横町 蘭契舎 碓俵三郎

駿河国静岡 江尻 清水 興津 由井 蒲原 岩淵

国吉田 今宿 倉沢

駿州静岡宿江川町 杉本平七

遠江国浜松 気賀 金指 中川 井伊谷 大山

遠州浜松宿伝馬町内国通運会社 林弥十郎

遠江国浜松 市内

遠州浜松紺屋町 明進堂 中村利次

信濃国小諸 岩村田 上田

信州北佐久郡小諸町 相場七左衛門右広告致候也

東京日本橋区通り三丁目十一番地

時事新報社

東京神田区左柄木町廿一番地

時事新報特別売捌所 東海堂 平野晋

同じ広告は同月十四日の『静岡大務新聞』にも掲載さ
れる。ここに名前に見える浜松の中村利次は、明治十七
年十一月七日『静岡大務新聞』社告「本社新聞発売所及
発売人」に名前が見える。同紙明治十八年七月十四日社
告に「社告／本社新聞発売所浜松宿中村利次儀新聞代価
払込無之、仍テ這回相廃シ候。就テハ是迄同人ヨリ御購
読ノ諸君モ有之候ハ、直チニ本社ヨリ配達可仕候間、
御宿所御姓名共御通知有之度此段広告ス。／明治十八年
七月／静岡大務新聞社」とあって、同紙との提携は途切
れていた。しかしこの記事によって浜松地域において県
内紙以外の新聞流通の一角を担っていたことがわかる。

その中村の名前を売弘として確認できた書籍・雑誌は『団々珍聞 二百七十七号』(明治十五年、団々社)、『勸繡像奇談』(明治十六年、九春社)、『才子吃驚草紙 編』(同年、絵入自由出版社発兌)、『怪談牡丹燈籠 五編』(明治十七年、東京稗史出版社)で、これも稗史小説類の取扱いを確認しうる。また先述した杉本平七の名前もこの広告に見えることも確認しておきたい。

二十年五月五日『静岡大務新聞』に「新聞迅速配達廣告」と題し「看客諸君之御便利之為メ本月一日ヨリ東京東海堂ト特約ノ約ヲ結ヒ東京各新聞紙幸便ヲ以テ通送仕候ニ付先ツ第一着藤枝市内限連日二日目正午ニ配達仕候(是迄三日目配達之処即チ一日間ノ早達ナリ)尚ホ通送方便利ヲ計リ追々市外及支店等ニ至ルモ同時御達可致候間依テ御愛顧之諸君一層御引立旧ニ倍シ御購読之程奉願候也ノ東海道藤枝宿ノ荷物急便通送集配所ノ各新聞雑誌稗史小説書籍売捌所 育伸社」という広告を育伸社は掲出している。「荷物急便通送集配所」であり「各新聞雑誌稗史小説書籍売捌所」である。

さて、先掲『時事新報』広告においても、無通送料広告を実現したのは東海堂との特約によるものであり、この広告においても東京各紙の「迅速配達」は東海堂との特約による「幸便」によってのものであることが述べられている。育伸社が売捌として掲げる「稗史小説書籍」

また先に述べた杉本平七が勉強発売した「稗史小説書」がこの流通に拠るものである蓋然性は極めて高い。東海堂は、明治十八年六月三十日「自由灯」広告に「来る七月十一日開店新聞雑誌書籍類大取次約定地への通送手便を以てし従前に比し一日間速達ノ東京々橋区元数寄屋町一丁目三番地 東海堂」とあって、明治十八年七月開店の取次業者である。十八年七月三十日『絵入朝野新聞』広告によれば、東海堂は朝野新聞社および絵入朝野新聞社との間に特約を結び、両紙の神奈川県諸地域の無通送料配達を開始している。それが翌年には静岡県域に及ぶわけである。

明治十九年二月十八日『絵入自由新聞』掲載の広告に「移転并ニ府下売捌開業廣告ノ弊堂義是迄京橋区元数寄屋町に於て諸新聞雑誌等各地方へ限り大売捌致居候処、御蔭を以て逐日繁盛に趣き、家屋手狭に相成候に付、今般左の所へ移転致し、本月十六日より拙者一手に業務引受、更に四月一日より府下売捌をも相始め、各本社同様配達の迅速を旨とし、務て愛読諸君の御便利を謀り、一層ふん発勉勵仕候間、何卒旧に倍し陸続御注文被仰付度、此段謹て廣告仕候。ノ新聞の種類并に予約長短に依り、景物として金五錢以上二十五錢以下の書籍雑誌類を進呈仕候。配達は毎朝未明を以て無相違御届可申候新聞雜誌代価は前金に非されは配達不仕候。当分府下配達の区域は

神田日本橋京橋麴町牛込小石川本郷下谷の八区とす。尚各地方取次御届の方へは本社同様割引を以て御相談可仕候。／新聞雜誌大売捌所 神田佐柄木町二十一番地 東海堂 平野晋」とある。同紙の記事にも「●東海堂 諸新聞雜誌取次売捌の業を手広く営なむ京橋区元数寄屋町の東海堂は日を逐て繁昌に赴むき従来の家屋手狭になりたるに付き今度神田佐柄木町へ移転し一層勉強して諸新聞雜誌売広の業務に従事し尚ほ花主へ対して種々の景物を進呈する由委細は広告に在り」とあって、半年足らずで規模を大きくする成長ぶりである。このような中間流通業者が有利で速やかな流通を実現する前にも、新聞・雜誌流通の「幸便」によって稗史小説類が流通していたであろうが、東海堂のような取次が出現して、それを一気に加速したものと思われる。新聞・雜誌の販売を行っていた業者が稗史小説類を取り扱うようになる必然はここにあり、彼ら取次の出現も時代の必然といつてよかる。

出張販売

左は明治二十年三月十七日『静岡大務新聞』雑報欄掲載の記事である。

●書籍売出の競争 東京日本橋の春陽堂、当国の博

雅堂等の書籍商は、遠州周智郡森町村中町の谷口屋にて本月十四日より三日間特別大安売を始め各地へ広告札を揚げたるに、又掛川宿の書肆三原屋甚蔵も同じく森町小池屋と云へる店を借受け、本月十二日より廿日迄の間勉強書籍大安売の広告を湯屋理髪店其他辻々へ張出し、我得意場を横領されざる様にと専ら防御する有様なれば、同地の人々は実に凡ての物事繁劇に至るの世の中なりといひ合へる由なるが、右の如き次第ゆゑ、狭き土地といひ、売捌け口は双方とも上景気とは行ぬ様子なりといふ。

博雅堂は静岡呉服町一丁目二番地の青木栄次郎で、明治十三年『小学地誌略』の出版もある。明治初年代から教科用図書をはじめ、さまざまな書籍を取り扱ってきた地域の有力書店の一つである。『静岡大務新聞』(明治十八年十一月十日)広告に「曹洞宗専門校書籍類／右者今般弊堂ニ於テ販売仕候其他諸宗之仏書共売捌候間沢山御用向被仰付候様奉希候／十月 静岡呉服町二丁目 博雅堂 青木栄次郎」とあって仏書も扱う書物屋であった。それが東京の春陽堂と組んで安売用書籍を仕入れて森町で出張販売を行ったものようである。

掛川十王町の三原屋甚蔵は、明治十年代初頭から諸書の売弘書店一覧記事に名前を見出せる。掛川では中心と

なる書店であったようで、この記事が言うように、森町も彼の「得意場」の内であったようである。青木の挙に對抗的に安売りを展開しようとしたものの、狭い地域での競合は双方にとって良い結果にはならなかったようである。

この記事で注目される場所は広告手法である。青木の場合は「各地へ広告札を揚げ」、三原屋の場合は引札を「湯屋理髪店其他辻々へ」貼り出すという方法で、新聞を利用して見当らない。実際この間の新聞広告に両店の安売広告は見当らない。新聞広告を便りにした書籍安売りの実態把握には限界があるということ、広告からうかがえる以上に、全国津々浦々でこのような書籍安売りが行われていたと考えなくてはならない。

新聞広告を利用した広域的、またあるいは地域に密着したな書籍安売りが行われるいっぽうで、明治十八年の終盤から、出張による書籍安売りが新たな方法として兎屋を皮切りに行われていくようになる。新聞広告からうかがう限り、それは、兎屋や駸々堂など営業力を備えた書店、また新聞流通を束ねていた石版舎のような店による地方都市を拠点としたものであるが、それらの展開とともに、地域の小さな市場を食い合うような、地域の書店による出張販売が細かく行われていたと考えてよいのであろう。明治二十一年になると、全国的に書籍安売りが

の新聞広告が息を潜めるようになる。それは、このような小規模の出張販売が至るところで行われはじめて、安売り業者が市場と目していた地方の人々が、リスクのより低い方法で、現物を手に取って廉価な書籍を入手できるようにになり、新聞広告の効果が減少したからかもしれない。

*

以上、静岡県地方紙を主たる資料として、静岡県における書籍と新聞・雑誌類の流通の様相とその変化をたどってみた。(鈴木俊幸)

*

(すずき としゆき 本学教授)

(ともなり つよし・おおいし あかり・

かねこ みき・こくぶん みなほ・

ますだ りり・ゆざわ ともみ

本学学生)

